

須坂学園構想基本方針（案）についての主な質問と回答（Q & A）

I 須坂学園構想 基本方針案の全体にかかわること

1 少子化が急速に進行しています。学校再編が6～7年後では遅すぎるのではないですか。

新しい学園をつくるためには、校舎や設備を整えたり、通学方法を考えたりする必要があります。また、学校の名前や校章、校歌なども決めていきます。

このような準備には、ある程度の時間が必要です。そのため、開校まで6～7年を見込んでいますが、準備が整えば、予定より早く開校できます。

2 子どもの数は6～7年後どれくらいですか。

子どもの出生数から計算すると、2030年度の児童生徒数は3,132人になる見込みです。2026年度の児童生徒数は3,498人ですので、4年間で約400人近く減ると予想しています。市内11の小学校の校舎は、既に建てられてから40年以上がたっています。校舎が建てられたころの児童生徒数は約7,000人でしたが、現在はその半分以下です。

3 学校再編によって、地域から小学校がなくなることで地域が衰退しないか心配です。

地域から学校がなくなると、学校と地域とのつながりが弱くなるのではないかという心配があります。しかし、新しい学校では、小中一貫教育やコミュニティ・スクールを進めることで、これまで以上に地域の皆さんや保護者の意見を学校運営に取り入れていきたいと考えています。

また、子どもたちが地域の自然や文化、歴史などについて探究的に学ぶ活動を充実させ、さまざまな地域のことを深く学べるようにしていきます。

こうした取り組みによって、学校と地域とのつながりは、これまで以上に強くなることも期待しています。さらに、地域では、これまで学校が中心だった地域活動を、公民館などを中心とした活動へ広げていくことも考えられます。

使わなくなった校舎やグラウンド、体育館を今後どのように活用するかについては、市長部局と連携し地域の皆さんと一緒に考えていきます。

II 教育活動にかかわること

4 小中一貫教育のメリットは何ですか。

① 学力の向上に向けた取組が期待できます

小中一貫教育では、9年間を見通して学ぶことができます。小学校で苦手だった内容を中学校でしっかり学び直したり、早い段階から教科専門の先生が授業を行ったりすることができます。

また、小学校の学びと中学校の学びをより継続的行うことができます。
さらに、学校が9年間通した子どもの成長を見守ることができるため、一人ひとりのよさや個性を伸ばしやすくなります。

② 小学校から中学校への不安が少なくなります

小中一貫教育では、小学生と中学生が日ごろから交流します。そのため、中学校へ進学するときの環境変化による不安や戸惑いを減らすことが期待できます。

例えば、「上級生と下級生が自然に交流できる」「学校生活の環境が大きく変わらない」「学習のつながりを大切にできる」などのよさがあります。

③ 幅広い年代との関わりの中で人間力が育ちます

さまざまな学年の子どもたちが一緒に学ぶことで、多くの人と関わる対人関係を形成する力が育ちます。上級生への憧れや尊敬の気持ち、下級生への思いやりなども育まれます。

④ 思いやりや助け合いの気持ちが育ちます

1年生から9年生（小1から中3）までと一緒に活動することで、上級生は下級生を助けたり、優しく接したりする気持ちが育ちます。

⑤ 中学校への進学が安心になります

小学生が普段から中学生の生活を見ることができると、中学校への不安が少なくなります。

⑥ 上級生としてのお手本の意識が高まります

上級生は、下級生から見られていることを意識するようになります。そのため、手本になろうとする気持ちが育ちます。

⑦ 下級生の上級生に対するあこがれの気持ちが育ちます

下級生は、上級生の姿を見て「自分もあんなふうになりたい」と感じるようになります。

⑧ 自信や達成感が育ちます

小学生から中学生まで先生同士が子どもの情報を共有しやすくなるため、一人ひとりに合わせたきめ細かな支援がしやすくなります。その結果、「自分にはできる」という自信や達成感を育てることが期待できます。

⑨ 学ぶ意欲や学習習慣が身につきます

9年間を通して継続した指導ができるため、子どもに合った学習支援を行いやすくなります。そのため、学ぶ意欲が高まり、学習習慣の定着が図れます。

5 小中一貫教育のデメリットはどのようなものがありますか。

また、そのデメリットにどう対応しますか。

① 人間関係が固定される心配があります

9年間同じ学校で過ごすことで、人間関係が固定される心配があります。

一方で、文部科学省の資料では、小中一貫教育によって、いじめや不登校などが減った事例も紹介されています。また、複数の学級がある場合は、クラス替えを行うことで、人間関係にも配慮できます。

② 5・6年生のリーダー役が少なくなる心配があります

これまでの小学校では、6年生が中心となって活動してきました。小中一貫教育では、中学生がいるため、5・6年生の活躍の場が減るのではないかという心配があります。そのため、先進校では学校行事や活動ごとに、主体となる学年を決めて、役割を割り振る工夫をしています。多くの学年がリーダーとして活躍できる場を設けています。

③ 中学生の生活面の影響を心配する声があります

中学生の生活面の問題が、小学生に影響するのではないかという心配があります。

しかし、全国の義務教育学校の好事例として、中学生が小学生に優しく接する姿が多く見られるという声があります。

④ 教室や運動場などの広さが必要になります

1年生から9年生までが一緒に使うため、教室や運動場など、広いスペースが必要になります。校舎開設にあたり、学習スペースのある図書館や多目的スペースの設置を検討するなど、学びやすい環境を整えていきます。

⑤ 安全面への配慮が必要です

小学生と中学生では体の大きさが違うため、安全に生活できる工夫が必要です。そのため、廊下や階段、遊び場などを、安全に使えるよう計画して整備します。

⑥ 小学生と中学生の時間の違いへの対応が必要です

小学校と中学校では、授業時間や日課が違います。そのため、先進校では、小学校の時間割と中学校の時間割を合わせ、全校で同じ日課になるよう工夫しています。

例えば、小学校は45分、中学校は50分の授業時間ですが、中学校の授業時間を45分にし、その分を朝活動の時間に割り振り学習調整活動として、ドリル等の基礎学力をつけたり読書をしたりする時間にあてています。

6 小規模特認校制度とはどういう制度ですか？導入するメリットとデメリットはどのようなものがありますか？

特認校制度とは、小規模校で行う学校選択制度の一つです。住んでいる地区だけでなく、市内に住んでいれば、小規模特認校制度を導入している学校へ通うことができます。

よい点

○学校を選べる幅が広がり、子どもや保護者の希望に合った学びの場を選ぶことができます。

- 学区外の子どもたちとも交流でき、人間関係が広がります。
- 地域の特色を活かした学習活動を行いやすくなります。

課題となる点

- 通学する範囲が広がることから、通学の負担が増える場合があります。
- 学区外の学校へ通うことで、自分の住んでいる地域の友達との関わりが少なくなる場合があります。
- 学校全体の児童生徒数の減少を根本的に解消する手段にはなりにくい面があります。

7 小中一貫教育で、小学校から中学校まで人間関係が固定し、いじめが中学まで継続しないか心配です。

文部科学省の「小中一貫した教育課程の編成・実施に関する手引」には、小中一貫教育を進めている学校では、いじめや不登校、暴力行為などが減った例が紹介されています。

また、人間関係が固定されないようにするため、一つの大きな学園として考えています。さらに、1学年に2学級以上あれば、クラス替えを行うことができ、人間関係にも配慮しやすくなります。

8 小中一貫教育で、体格の大きい中学生から小学生へのいじめ等が起こらないか心配です。

先進的に義務教育学校として開校した 信濃小中学校 の校長からは、

「中学生は、行事や学習で小学生と関わると、とても優しくなる」と伺っています。

また、三条市四つ葉学園では、「いじめ見逃しゼロスクール運動」を小学生と中学生が一緒に行い、安全で安心して過ごせる学校づくりを進めています。小中一貫校では、小学校と中学校の先生が連携して子どもたちを見守ることができるため、問題が大きくなる前に気づき、早めに対応できることが期待できます。

9 義務教育学校と小中一貫型学校の違いは何ですか。それにより教育内容などに差が生まれませんか。

義務教育学校は、1年生から9年生までを一つの学校として運営します。教職員も一つの組織となるため、より柔軟に授業や学習内容を組み立てることができます。

一方、小中一貫型小学校・中学校は、小学校と中学校は別々の学校ですが、教育課程の工夫をしたり、教職員が連携したりしながら9年間を通した教育を行います。

須坂市では、義務教育学校と小中一貫型学校の両方を考えているため、学校によって学習内容に大きな違いが出ないように、カリキュラム開発委員会などで検討していく予定です。

10 同じ市内でも通学区域によって、義務教育学校と小中一貫型学校があるのはなぜですか

須坂市では、義務教育学校と小中一貫型学校のどちらも、小中一貫教育の教育課程をつくる予定です。そのため、学習内容や教育活動に大きな違いはありません。

学校の形は、子どもの人数や学校の規模を考えて決めていきます。例えば、第二学園は児童生徒数が多いため、一つの義務教育学校にすると学校が大きくなりすぎる可能性があります。そのため、子どもたちが学びやすい環境を考え、小中一貫型小学校・中学校としています。

11 須坂学園構想をすべての地域で同時にスタートすることはできませんか。

第一学園から第四学園までの構想案を示していますが、すべての学園を同時に始めるためには、多くの準備期間が必要になります。また、校舎の整備などが同じ時期に集中すると、費用や人手が不足する心配があります。現在、児童生徒数が急激に減り、学びの環境を整えることが特に大きな課題となっている学校もあります。そのため、そうした学校を優先しながら、順番に学園の整備を進めていく構想としています。

12 小規模校の方が、先生たちの目が届きやすく、細やかに教育に当たることができると思います。

小規模校には、子ども一人ひとりの学習や生活の様子を把握しやすく、きめ細かな指導を行いやすいというよさがあります。

そのほかにも、次のようなメリットがあります。

- ① 発表する機会が多く、一人ひとりが自分の考えを伝えやすい
- ② 行事や活動で、リーダーとして活躍する機会が多い
- ③ 運動場や体育館、特別教室などをゆとりをもって使いやすい
- ④ 教材や教具が一人ひとりに行き渡りやすい
- ⑤ 異なる学年での交流や学習活動を行いやすく、校外学習や体験活動を柔軟に行いやすい
- ⑥ 地域の協力を得やすく、地域の特色を活かした学習を進めやすい
- ⑦ 家庭や地域の状況を把握しやすく、保護者や地域と連携した支援を行いやすい

このように、小規模校には、少人数ならではのよさがあります。

一方で、小規模校には、次のような課題もあります。

- ① 多くの友達と関わる機会が少なく、さまざまな考え方や価値観に触れる機会が限られる
- ② クラス替えができない学年がある
- ③ クラス同士で競い合い、高め合う活動が行いにくい
- ④ 少人数指導や習熟度別学習など、クラスの枠を超えた多様な授業の工夫が難しい場合がある
- ⑤ クラブ活動や部活動の種類が少なくなりやすい
- ⑥ 運動会や文化祭、修学旅行などの集団活動に制約が出ることがある
- ⑦ 男女の人数に偏りが出やすい
- ⑧ 体育の球技や合唱・合奏など、少人数でしか行えない学習になってしまう。
- ⑨ 班活動やグループ分けのパターンが限られる
- ⑩ 協力して学ぶ活動で、取り組める内容に制約が出ることがある
- ⑪ 特定の子どもの意見に、クラス全体が影響されやすくなる
- ⑫ 多様な意見が出にくく、授業の進め方に制約が出ることがある
- ⑬ 先生と子どもの心理的な距離が近くなりすぎるおそれがある

このように、小規模校にはよい点もありますが、学校生活や学習活動の充実の面で課題となることもあります。

13 現在の須坂支援学校は、須坂小学校と同じ校舎で学びながら、交流活動などを通して子どもたちが、お互いを知る機会が多くあります。須坂学園構想で須坂支援学校はどうなりますか。

インクルーシブな教育を進めるため、須坂支援学校は、第二学園の開校に合わせて、同じ敷地内に開設し、インクルーシブな教育環境を整えます。校舎をどのように配置するかについては、今後検討していきます。

また、須坂支援学校がセンター的機能を発揮できるように、専門的な支援や相談機能をさらに充実させ、市内の学校でも特別支援教育をより充実させていきます。そして、子どもたちがお互いを理解し支え合える、共生社会を担う力を育てていきたいと考えています。

14 不登校の子どもたちが通える場所もしっかりと考えてもらいたいです。

学園内には、教室以外でも安心して過ごせる場所として、教育支援センターを設置する予定です。対象は、小学校1年生から中学校3年生までの子どもたちです。学習をしたり、気持ちを落ち着かせたりしながら、不登校や学校生活への不安の改善につなげていきます。

現在も、須坂市の教育支援センター「フレンドリールーム」では、専門的な支援のもと、小学生と中学生と一緒に活動しています。その中で、コミュニケーション力が育ったり、人との関わりへの不安がやわらいだりする様子が見られています。

こうしたことから、各学園に校内教育支援センターを設置したいと考えています。

15 須坂市の小中一貫教育のカリキュラムは具体的にどのような内容ですか。

須坂市では、新しい教育の特色を紹介するリーフレット「須坂市の小中一貫教育」を作成し、2025年4月に全戸へ配布しました。リーフレットでは、須坂市がめざす小中一貫教育の5つの特色と、特に力を入れて進める4つの教育の柱を紹介しています。

また、具体的な授業内容や学習の進め方については、これから設置するカリキュラム開発委員会で検討していく予定です。

Ⅲ 通学区域、通学方法にかかわること

16 通学区域の見直しで、兄弟姉妹で、別々の学校になってしまう場合はどうなりますか。

兄弟姉妹で指定中学校が分かれてしまう場合、ご家庭から希望があれば、教育配慮の観点から、兄または姉と同じ中学校に進学することをできるようにする予定です。

17 通学区域の見直しで、進級する際に学校が変わってしまうことはありませんか。

新しい学園の開校に向けて、通学区域の見直しを進めていきます。そのため、住んでいる地区

によっては、通う学校が変わる場合があります。そのため新しい学園校舎を開設する前から、統合する学校同士で交流する機会を増やしていきます。子どもたちが新しい学校でも安心して友達づくりができるよう、さまざまな取組を進めていく予定です。

18 通学区域が変わって通学時間が長くなる場合は、スクールバスを導入できないでしょうか。

学校までの距離が遠くなり、通学時間が長くなる場合は、子どもたちの通学の負担を考え、公費によるスクールバスの導入を検討します。文部科学省の考え方では、子どもの健康や安全の面から、徒歩通学の目安を、小学校ではおおむね4 km 以内、中学校ではおおむね6 km 以内としています。スクールバスを導入する場合は、新しい学園の開校までに、運行する地域や時間、バス停の場所などについて、保護者や地域、学校と検討しながら決定していきます。

IV 学校運営にかかわること

19 小中一貫教育によって、教職員の仕事が必要以上に増加しませんか。

小中一貫教育では、小学校と中学校の先生と一緒に教科ごとの話し合いや研究を行うことができます。先生同士が協力して授業づくりや教材研究を進めることで、9年間を見通したわかりやすい学習につなげることができます。また、教材づくりや授業準備を、一人だけで抱え込まずに進めやすくなります。

さらに、小規模校で課題となっている、

- ・一人の先生が多くの仕事を担当しなければならない
 - ・研修や宿泊行事などで先生が不在になると、授業の調整が難しい
- などの点についても、先生同士で協力しやすくなり、改善が期待できます。

20 PTA 活動はどのようになりますか。

PTA 活動については、新しい学園の開校までに、保護者や学校などで話し合いながら決めていく予定です。

21 学園名、校歌、制服はどうなりますか。

新しく設置する準備委員会で、新しい学園の名前や校歌、制服などについて話し合い、検討していく予定です。

22 第一学園の義務教育学校では、運動会や音楽会はどうなりますか。

新しく設置する準備委員会で、学校行事の内容や進め方も含めて、今後のあり方を検討していきます。

23 第一学園の義務教育学校では、6年生の卒業式はどうなりますか。

義務教育学校では、原則として、小学校の卒業式という形では行わず、修了式を行っている学校があります。須坂市では、義務教育学校と小中一貫型学校の両方を設置する予定ですので、校種間で学校行事などに大きな違いが出ないように、準備委員会などで検討していく予定です。

24 児童クラブはどうなりますか。

新しく設置する準備委員会で、児童クラブの運営や活動のあり方について検討していきます。

V 施設にかかわること

25 学校として利用しなくなった校舎どうなりますか。

まだ決まっていません。今後、地域の皆さんと相談しながら、校舎や施設の活用方法を考えていきたいと思っています。

また、校舎は、教育支援センターやユースセンター、フリースクールなど、子どもたちの居場所としても活用できる可能性があります。